

## 2. 労働と人間

- 2.1 はじめに
- 2.2 人間の特徴
  - 2.2.1 力の高度な制御・統一
  - 2.2.2 力の自覚的な制御・統一
- 2.3 労働過程
  - 2.3.1 労働対象
  - 2.3.2 労働手段
- 2.4 労働にかんするカテゴリ
  - 2.4.1 労働力と労働
  - 2.4.2 具体的労働と抽象的労働
  - 2.4.3 新労働と旧労働

### 今回の課題

- 人間の労働の特質を把握する
- 労働と、人間のまわりの自然との関係を把握する

### キーワード

労働, コスト, 効率, 知識, 労働対象, 労働手段, 労働力, 具体的労働と抽象的労働, 新労働と旧労働

### 2.1 はじめに

ここでは、人間という生命の特徴を“労働”をキーワードにして考えてみたい。人間と、たとえば類人猿のような——人間以外の——高度な生命体との違いはなんだろうか。自然科学では、それなりに厳密な区別が可能である。しかし、自然科学が明らかにしているのは、自然存在としては、人間は類人猿とはそれほど違わないということである。あるのはただ“程度の違い”だけである。

だが、結果から見ると、人間と類人猿とは根本的に違っている。人間は世界規模でのネットワークを作ることができ、これを通じて世界中の人間がコミュニケーションすることができる可能性が生まれたが、猿に

はそんなことはできない。人間は核兵器を作ることができ、これを通じて自分たちを滅ぼしてしまいかねない力を手に入れてしまったが、猿にはそんなことはできない、などなど。

だから、自然ではなく社会を分析する際には、重要なのは、どういう“程度の違い”が人間をその他の生物から根本的に区別する原因になったのかということなのだ。類人猿から人間が生まれてきた時には、類人猿と、生まれたばかりの人類との違いは“程度の違い”でしかなかっただろう。だが、この、なんらかの“程度の違い”が原因になって、上で述べたような根本的な違いを結果としてもたらしたのである。

### 2.2 人間の特徴

#### 2.2.1 力の高度な制御・統一

生命についてはいろんな考え方がありうる。だが、ここでは、現代社会の分析に必要なかぎり、生命と

いうものを簡単に特徴づけてみよう。

生命あるもの（＝有機的なもの）とは、「他者との関係において自己を維持するもの」のことである。「他者」

というのは、自分と同じ生物のことだけではない。自分のまわりにある全自然のことである。

さて、生命あるものの中で最も発展しているのは人間である。例えば、人間は、個人として他の個人と友達になるが、だからと言って、自分の人格を失ってしまうわけではない。同様にまた、人間は鶏肉を食べるが、だからと言って鶏人間になるわけではない。これに対して、生命のない鉄は溶鉱炉の中では別の鉄と溶接されてしまうし、また酸素と化合すれば酸化鉄になってしまう。

吐き出された唾を見て、「これは人間だ！」と思う者はいないであろう。だが、唾は人間の体内にある限りでは、明らかに人間の一部である。切り落とされた髪の毛は人間の一部ではないが、頭皮から生えている髪の毛は明らかに人間の一部である。

それでは、このような生命を成立させているのはどんな活動なのだろうか。前回は述べた「物質代謝」こそは、自分のまわりの自然と関係しながら、そこから自分の生命の維持にとって必要なものを吸収し、こうして自己を維持していく過程なのである。そこで、物質代謝を思い出してみると、それは生産と消費という契機からなりたっていた。

まず、人間の消費をトータルに考えてみると、確かに猿とはずいぶんと違っている。たとえば、人間も猿もものを食べるが、人間はいろんな道具を使っているし、その消費をつうじて文化を形成している。だが、消化活動そのものは、人間も猿もたいして違わない。欲求についても、いろんなものを生産することができるからこそ、いろんな欲求が生まれるのである。こういうわけで、われわれは、この問題を考える際に、生産という側面から、見ていかなければならない。

たとえば、人間にとって、呼吸というのは、物質代謝の不可欠な要因である。と言うか、そもそも呼吸をしていなければ生きていられない。呼吸において、人間は、まわりの自然から空気を取り込み、それを体の中で酸素に変換して、二酸化炭素としてまわりの自然に帰す。酸素に変換するというのも、一種の生産、酸素の生産である（ただし、この講義では、今後「生産」と言ったとき、人間が行う生産のことだけを指す）。だ

が、こんなことは、人間は本能のおもむくままにやっているのである。物質代謝の中で呼吸を選んで考察するかぎりでは、人間も猿も大して変わらない。

しかし、人間は生産において、そのような、本能のおもむくままに行っている活動とは別の活動をもまた、行っている。そのような活動を**労働**と呼ぶ。

労働とは、なによりもまず、自分自身の力と自分のまわりの自然の力を、高度に制御するということである。つまり、物質代謝を自分の過程として行うということである。考えようによっては、人間以外の高度な生命体も似たようなことをしている。だから、この点では、違いは「程度の差」である。しかし、出発点における、その程度の差が蓄積・増幅されて、空間的に（種族から種族へと）伝播し、時間的に（世代から世代へと）継承され、それが結果として今日の人間の状況を作っているのである。

それでは、今度は結果から、人間と、その他の高度な生命体との根本的な違いを見ていくことにしよう。

## 2.2.2 力の自覚的な制御・統一

今日では、違いは程度の差ではなく、はっきりしている。すなわち、他の生命の物質代謝から人間を区別する労働の特質は、(1) 実際に生産する前に頭の中で生産しているという点（知識の適用）、そして(2) 実際に生産しているあいだは自分の意志のもとに自分の力を服させるという点（意志への従属）である。

### 2.2.2.1 知識の適用

第一に、人間は、実際に生産する前に、まずもって頭の中で生産している。たとえばクモは実に上手に巣をつくる。私にはあんな器用さはない。また、現代科学の粋をもってしても、クモの糸をつくって、それを編んで巣をつくるというのは、なかなか困難なことである。だけれども、巣をつくる前に設計図を書いているクモってのは見たことがない。クモはしょせん、本能のおもむくままに巣を作っているにすぎない。これにたいして、人間は、自分の自由なイメージにもとづいて、——たとえどんなに下手くそであっても——、生産することができる。イメージ通りにならなかつたら、次はイメージ通りになるように工夫することがで

きる。いやおうなしに、対象のことを知らなければならぬようになるということである。人間は木造二階建ての家を作ることができるし、30階建ての高層ビルを作ることができる。

一見すると、家を建てるのに設計図を書かなければならないってことよりも、本能で巣を作ることができるってことの方がすごいことのように見えるかもしれない。だが、それは話が逆なのだ。人間は頭の中のイメージに応じて生産物を多様化させることができ、そういう能力を通じて欲求を多様化させ、今度は反作用的に生産物を多様化させることになる。あるいはまた、人間は対象についての知識を利用して、どういうふうにしたらより少ない労働で同じ結果をもたらすことができるのか、工夫することができる。

つまり、人間はいやおうなしに賢くならざるをえない。このような意味で、人間の労働は知識の産出である。そしてまた、そのように知識が産出されるやいなや、そのような知識を前提して、そのような知識にもとづいて、労働が行われる。このような意味で、人間の労働は知識の適用である。われわれは、労働のこの側面が、現代社会において、“科学的知識の意識的・計画的な適用”という形で、実現されているのを、後に見るであろう。

#### 2.2.2.2 意志への従属

第二に、人間は、実際に生産しているあいだは、一つの意志、自分の意志のもとに、自分の肉体的・精神的な力を従わせる。

人間は、生産を行うあいだに、自分の意志でそれをやりとげる。このことは、逆に言うと、自分の意志で生産をやめることもできるということである。やりとげるのであろうと、やめるのであろうと、いずれにせよそういう決定をくだすのは——たんなる本能ではなく——自分の意志なのである。

人間は自分で自分に命令することができる。命令する自分と、命令される自分とに自分を分けることができる。こうして、人間は自分を自分の対象にしているわけである。

#### 2.2.2.3 コストとしての労働

以上、猿とは根本的に違っている現代人の労働の特徴をその“自覚性”という点から考えてみた。このように、人間の労働が、本能的な活動とは違った自覚的な活動であるということ（もっと正確に言うと本能的な活動を自覚的に実現しているということ）は、人間にとっては、労働が、なによりもまず、コストだということの意味する。

たとえば、本能的な生命活動の一例として、心筋の運動を考えてみよう。寝ている間も、自分の意思に関わりなく、本能的に、心筋は活動している。そのような活動をわれわれがコストとして捉えることは余りないだろう。心筋を動かすのに、私には、特に苦勞もいらないし、逆に喜びもない。また、——そもそもそういう気持ちにはならないだろうが——“心筋が動いているとカロリーが消費されて不経済だから、せめて寝ている間くらいはいつそのこと心臓を止めてしまう”というわけにもいかない。

これにたいして、労働、すなわち自覚的な生命活動の一例として、パンの生産を考えてみよう。パンは空中から手品のように発生するものでもなければ、寝ている間にいつの間にか、それをつくりたいとも思わなかったのに焼き上がっているというものでもない。そうではなく、自覚的に、すなわち、はっきりとパンを作りたいという意志を持って、焼き上がったうまそうなパンの姿をイメージしてから生産するものである。このように、パンの生産は、私が私の意思でわざわざ、意図的に、故意に行うものであるからこそ、心筋運動とは違って、コストになる。そして、できるだけこのコストを減らすこと、——最小のインプットで、量的に見て最大の、また質的に見て最高のアウトプットを達成すること——を私は追求せざるをえない。

自然（小麦、イースト菌、塩、水など）から生産されたパンは、やがて消費されるだろう。すなわち、咀嚼されて消化されて排泄されるだろう。この物質代謝の活動において、パンの生産は、コストを減らして効率的に行うべきものであり、実際にまた行うことができるものである。こうしてまた、私は、パン生産の労働を通じて、自分自身の物質代謝の活動をコントロー

ルし、効率的に実現していることになる。

それでは、今度は、このような労働にどのような契

機があるのか、考えてみよう。

## 2.3 労働過程

労働を一つの過程として見る場合、そこには労働、労働対象、労働手段という契機がある。

### 2.3.1 労働対象

最も単純なモデルを考えてみよう。自分と、自分のまわりの自然がある。ここで、自分の精神的・肉体的な力の発揮が労働である。筋肉の運動とか、大脳皮質の運動とかである。自分のまわりの自然が**労働対象**である。

注意していただきたいのは、自然を労働対象にするのは、その自然の素材的な性質ではなく、もっぱら労働の働きだけだということである。たとえば、私が目の前にある土に麦の種をまくというケースを考えてみよう。この場合、たとえ 100 キロかなたにある山の土と目の前の土とが全く同じ構成部分をもつ土だったとしても、100 キロかなたにある山の土は私の労働の対象ではない（他のだれかの労働対象になっているかもしれないが）。労働対象というものが自然界にあるのではなく、労働が行われることによって自然が労働対象になるのである。

### 2.3.2 労働手段

人間は、労働において、自分の目的を達成するために、自分の身体のあるとあらゆる器官を用いる。これは労働が自分の身体を手段として扱っているということである。このように、労働という制御・統一の運動は、その目的を実現するために、自分の身体を手段とする。

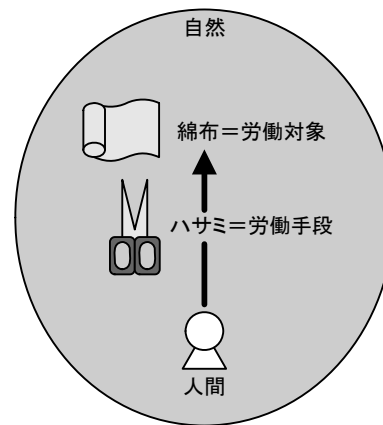
ところがまた、労働が自分の手段とすることができるのはなにも自分の身体だけではない。対象そのものから、自分の身体のように対象に働きかける手段を手に入れることができるわけである。

このように、労働は自分のまわりの自然の一部を、

自分と対象とのあいだに割り込ませて、“手段”として活用することができる。このよう手段を**労働手段**と呼ぶ。

たとえば、シャツの生産においては、綿布は労働対象である。綿布は裁断されてシャツになる。これにたいして、ハサミは労働手段である。人間はハサミを通じて綿布を裁断する。

図 1 シャツ生産における労働対象と労働手段



ここでもやはり、自然に“労働手段”という性格を与える——つまり労働手段を労働対象から区別する——のは、もっぱら労働の役割である。たとえば、全く同じ牛でも、田畑を耕す手段として使えば労働手段になるし、ミルクを絞る対象として使えば労働対象になる。

労働手段の使用によって——したがってまた労働手段の発明・改良によって——、コストとしての労働が飛躍的に減少する。労働がコストであり、また労働それ自身がこのコストを減らす活動であるからこそ、これまでの歴史において、人間は他の動物とは違って、実に多様で高度な労働手段を生み出してきたのである。

労働過程において、労働は、たんなる肉体的・精神的な力の発揮としては、労働対象、労働手段と並んでいる。だが、同時にまた、労働対象も労働手段も労働によって使われることではじめて労働対象、労働手段たりうるのだから、労働は、労働・労働手段・労働対象を統一する運動でもある。

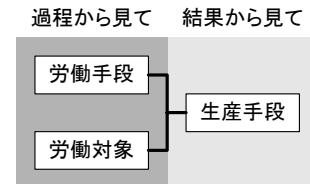
さて、このような労働の過程の結果は生産物である。過程の結果である生産物という観点から見ると、労働手段と労働対象との違いは意味がない。

たとえば、シャツ生産の結果は、ただの綿布でもハサミでもなく、シャツである。綿布とハサミが使われた——したがって綿布とハサミとの違いが意味をもった——のは労働過程の中だけである。結果である生産物＝シャツにとっては、綿布もハサミも、それを生産するのに使われたということでは同じである。要するに、過程の中をながめると労働対象と労働手段との違いが意味をもち、結

果をながめると労働対象と労働手段との違いは無意味になるわけである。

そこで、過程の結果である生産物の観点から見ると、労働対象と労働手段とを一括することができる。労働手段と労働対象とを一括して、どちらも、生産物を生産するのに使われた手段、すなわち**生産手段**と呼ぶことにしよう。

図 2 労働手段+労働対象＝生産手段

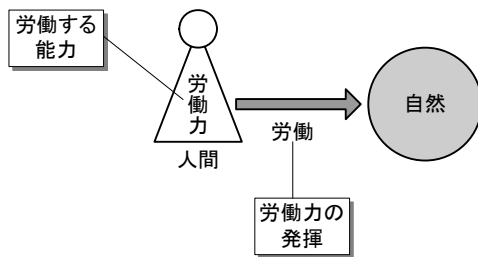


## 2.4 労働にかんするカテゴリ

### 2.4.1 労働力と労働

さて、労働そのものは、さまざまな肉体的・精神的な力の発揮であった。これらの肉体的・精神的な力は個人の身体の中にある。個人の身体の中にある肉体的・精神的な諸力の総体を**労働力**と呼ぶ。つまり、労働は労働力の発揮、労働力の支出である。

図 3 労働と労働力



労働力があるということと実際に労働するということは全く別のことである。現代社会では、そのような力、そのような能力をもっている個人は労働力人口の

一員としてカウントされる。しかし、労働力人口の一部分は失業者である。失業者は、少なくとも金をもらう労働をしているわけではない。つまり、この例では、失業者は、金をもらう労働をする労働力をもっていないが、金をもらう労働をしているわけではないのである。

### 2.4.2 具体的労働と抽象的労働

労働には、具体的側面と抽象的側面とがある。一日にいくつかの種類の仕事を行うことを考えてみよう。たとえば、今日は塀をつくり、また花瓶をつくと仮定しよう。この場合に、塀をつくる労働と花瓶をつくる労働とは全く違う労働であり、そのような労働の違いが——生産手段の違いといっしょになって——生産物の違いとして現れている。このような労働の具体的側面を**具体的労働**と呼ぶ。具体的労働で問題になっているのは労働の質であり、それぞれの労働が違っているということである。

これにたいして、一日の労働を割り振ることを考えてみよう。たとえば、一日に行う労働時間が時間 8 時間であり、そのうち、シャツをつくるのに 6 時間、シチューをつくるのに 2 時間、割り当てると仮定しよう。この場合に、シャツをつくる裁縫労働とシチューをつくる調理労働とはまったく違っているにもかかわらず、一日の労働時間の構成部分としては全く同じである。あるいはまた、そもそも「一日の労働」を考えた時点ですでに、どういう種類の、どういう具体的労働であるのかは全く問題にならない。このような労働の抽象的側面を**抽象的労働**と呼ぶ。抽象的労働で問題になっているのは、労働の量であり、どの労働も同じだということである。

労働をコストとして考える際には、抽象的労働が問題になってくる。上の例のように、一定の労働時間をどういうふうに割り振るか、あるいは逆に、いろいろな労働を足すと何時間になるのか、そういうことを考える際には、問題は、どのくらいの労働量——つまり抽象的労働の量——を支出しなければならないのかということである。あるいはまた、6 時間の裁縫労働と 2 時間の調理労働とでどっちが私にとって大きいコストをなすのかを考える場合には、重要なのは、裁縫と調理という具体的労働の質の違いではなく、6 時間と 2 時間という抽象的労働の量の違いなのである。

### 2.4.3 新労働と旧労働

コストの話が出たところで、もう一つ重要な問題がある。それは新労働と旧労働との区別の問題である。上の例では、6 時間の裁縫労働と 2 時間の調理労働とでのコストの比較を考えてみた。だが、実際に、その生産物である上着とシチューとにどれだけのコストがかかったのか計算しようとすると、ことはそれほど簡

単ではない。上着をつくるのには布だとか糸だとか鉄だとか針だとかのような生産手段が必要であり、そんなものは自然界には存在していないのだから、それ自身、労働の生産物である。だから、その生産物である上着にどれだけのコストがかかったのか計算しようとすると、6 時間の裁縫労働だけではなく、それらの生産手段を作るのに使った労働をもカウントしなければならない。同じことはシチューについても言える。だから、一日の労働時間を割り振るのではなく、生産物にどれだけのコストが実際にかかったのか——これはたとえば一年の労働時間を割り振る場合に重要である——、計算する場合には、生産手段を前提して、いまだれだけの労働（6 時間の裁縫労働と 2 時間の調理労働）がかかったのかという**新労働**の量だけではなく、その生産手段を生産するのに以前にどれだけの労働がかかったのかという**旧労働**の量をもカウントしなければならないのである。

図 4 上着とシチューとのコスト比較

生産物	上着		シチュー	
	裁縫労働	6時間	調理労働	2時間
新労働				
旧労働	布を生産するのに使った労働	3時間	肉を生産するのに使った労働	8時間
	糸を生産するのに使った労働	1時間	野菜を生産するのに使った労働	2.5時間
	⋮	⋮	⋮	⋮
	⋮	⋮	⋮	⋮

新労働だけではなく、旧労働もカウントしないと、上着とシチュー、どちらの方が、本当にたくさんのコストがかかったのかはわからない。